

2019年9月8日

植物界の「災害遺産」ミズアオイを知る連続ワークショップ 第一回

特定非営利活動法人 日本ビオトープ協会



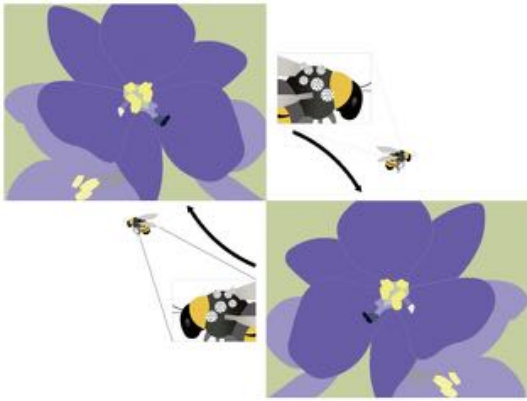
ミズアオイ *Monochoria korsakowii* Regel et Maack はミズアオイ科の一年草。東アジアに分布し、田、水路、湿地に生育する。圃場整備や除草剤のために減少し、絶滅のおそれのある野生植物として国や県のレッドリストに掲載されている。

かつては日本人に愛され、その後、疎まれるようになった植物です。2011年3月11日、東北地方太平洋沖地震は沿岸の自然にも大きな損害を与えました。その一方、岩手・宮城・福島津波浸水域から突如出現した美しい青い花の群落が、人々を驚かせました。それがミズアオイでした。震災からの再生を象徴する不思議な植物を紹介します。

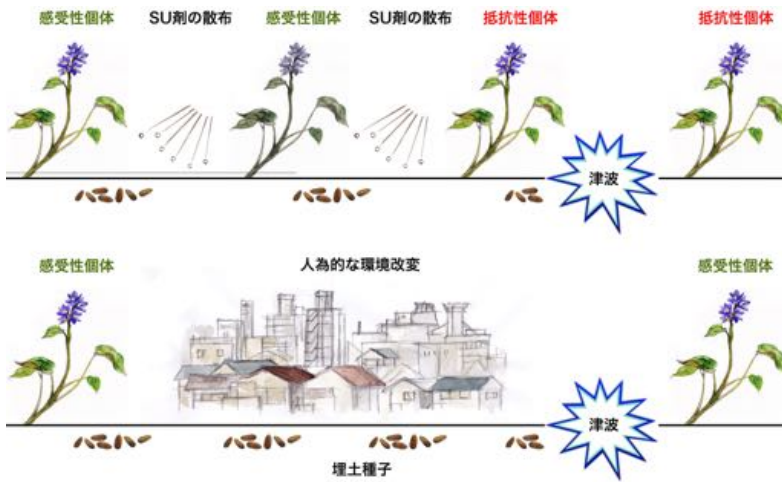
ミズアオイの復活は水田に多くみられたのですが、町の中心部の住宅街からの例もあります。堤防や道乗り越えた津波が裏側に勢いよく落ちるときに、深く埋まっていた種子を掘り出して発芽を促したようです。「そんなに大量に現れているのなら、今さら守らなくてもよいのではないか」と思われますが、この復活は東の間のものでした。復興工事の嵩上げなどで、ミズアオイは今度こそ、二度と目覚めることのない深みに埋められました。私たちは沿岸を往復しながら、生き残った個体の種子と葉を集めました。一部は内陸に設置したビオトープで育て、系統を維持しています。



醬酢(ひしおす)に 蒜(ひる)鵠(つ)き合てて 鯛願ふ 我にな見えぞ 水葱(なぎ)の羹(あつもの) 【万葉集 卷16-3829】。大昔の水田でイネとミズアオイと一緒に育てられ、食べられていたことはこれらの記述からも明らかです。またその美しい花は多くの絵画、焼き物、工芸品のモチーフになりました。ところが江戸時代中期以降、水田では米の生産だけが求められるようになり、さらにおいしい葉菜が普及するにつれ、ミズアオイは単なる邪魔者として除草の対象となりました。近代になってとどめを刺したのが除草剤(SU剤)です。こうして日本中からほとんどのミズアオイが姿を消しました。

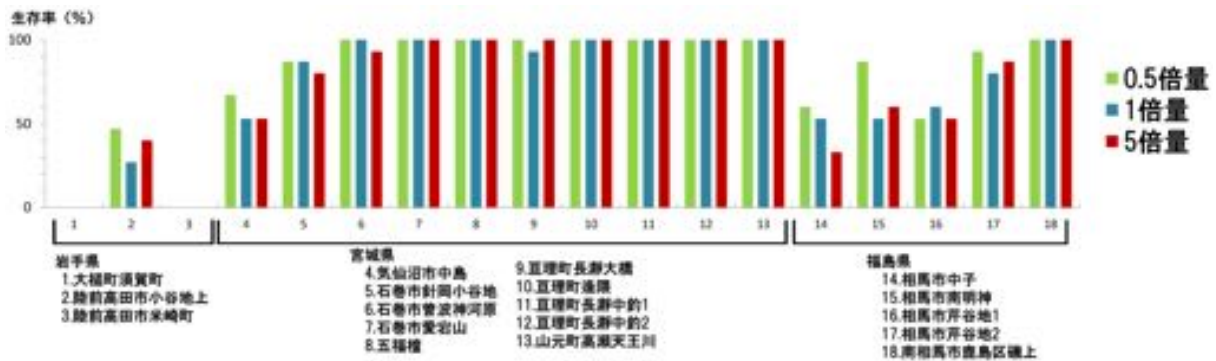


しかし、ミズアオイはきれいなだけの植物ではありません。おしべ(青紫の1本、黄色の5本)とめしべ(1本)の配置が、互いに鏡に映したように反対の二種類の花を持っています(鏡像二型性)。この二つの花によって他家受粉を促し、多様性を高めています。日本で初めて、SU剤への抵抗性を獲得したのもミズアオイです。(なお、抵抗性は優性形質です。)



図は過去(左)から現在(右)にかけて、ミズアオイの辿った二つの道を描いたものです。ミズアオイはSU剤によって著しく数を減らしましたが、1990年代に抵抗性をもったタイプが進化しました。それでも多くは埋土種子として存在するのみでした。一方、それ以前に生育地を失った感受性タイプも、地中深く種子として、

はるかに長い年月を過ごしていました。いずれのタイプも今回の津波で甦りました。地域によって二つのタイプの割合は異なります。



ミズアオイ(復活個体を作った種子からの発芽個体)に異なる濃度のSU剤を与えた後の生存率。

津波の度に復活した可能性のあるミズアオイは、植物界の「災害遺産」です。この植物が毎年見られ、人々が様々な想いを寄せることのできる場所を創りたいと考えています。

ワークショップ・ウェブサイト

<http://p-www.iwate-pu.ac.jp/~hiratsuk/190908/text.html>

